

元亨版『和語灯録』と『西方指南抄』の比較

——『三部経大意』の問題に関連して——

市川 定敬

〔抄録〕

金沢文庫蔵の『三部経大意』は『和語灯録』所収の「三部経釈」と同じ内容を持ちながら、至誠心釈については他の法然遺文には見られない特異な記述を有する文献である。この特異な至誠心釈について、『和語灯録』編纂者である了慧道光による削除の可能性が先行研究によって指摘されている。しかし、そうした変化が了慧によって行われたとするならば、それは『和語灯録』全体についての改変の可能性を示唆するものであり、『和語灯録』

自体の資料的価値の見直しが迫られる事態となる。本論文は、最古の版本である元亨版『和語灯録』とそれよりも古い『西方指南抄』に収録される並行する法語の比較し、異同箇所を分析しその可能性の低さを指摘するものである。

キーワード 元亨版『和語灯録』、『西方指南抄』、『三部経大意』、了慧道光

〈問題の所在〉

金沢文庫所蔵の『三部経大意』は、『和語灯録』所収の「三部経釈」と同内容の法語でありながら、その至誠心釈は『和語灯録』所収のものには見られず、さらには『選択集』等、法然の他の遺文には見られない思想を示す特異な記述を有する文献である。この特異な至誠心釈の問題について、編者である了慧道光によって、鎮西義の立場より

『和語灯録』に収録される際に削除されたという見解が先学によってなされている¹⁾。しかし、この仮説を認めたならば、了慧による本文の意図的な改変について、少なくとも『和語灯録』全体に渡り考慮しなければならなくなり、『和語灯録』の資料的価値の大幅な見直しが求められる事態となる。

そこで、本研究は、『和語灯録』よりも成立が古く、なおかつ鎮西義の影響を考慮する必要のない『西方指南抄』と元亨版『和語灯録』

を比較分析することによって、了慧道光によつて削除されたという可能性について検討したい。言うまでもなく、『指南抄』には『三部経大意』ないしは『三部経釈』は収録されていないため、『和語灯録』所収版の原形を求めることができるわけではないが、『和語灯録』と『指南抄』の両者に収録される文献を比較することによって、全体的な傾向は知ることができるのであり、これをもとに『三部経大意』の了慧による削除の可能性について考えたいのである。

〈作業の前提〉

本研究の前提とする考え方は次の通りである。

『和語灯録』所収の『三部経釈』が了慧による改変であるというのであれば、それは『三部経釈』のみではなく、元亨版『和語灯録』（一二二一年）所収法語全般に及ぶと考えられる。一方、『指南抄』（一二五六―一二五七年）は親鸞の真筆が現存するものであり、元亨版よりも古く、当然了慧による改変は考えられない。親鸞による改変の可能性ということが指摘されているが、言うまでもなく親鸞は鎮西派ではなく、そのバイアスも異なっているはずである。したがって、『和語灯録』と『指南抄』、それぞれのソースが同一のものであれ異なるものであれ、両者の間には相当の異同が生じているはずである。この異同を確認することによって、両者の改変の可能性について、どの程度の変更がなされたのか推測できると考えられる。これが、金沢文庫所蔵の『三部経大意』と『和語灯録』ほどの改変が了慧によってなされたものとみなすことが妥当かどうかを判断するための手がかり

になると考えられるということである。

つまり、金沢文庫所蔵『三部経大意』の至誠心釈が、了慧によつて削除されたものであるというのであれば、同様、同程度の削除が他の『和語灯録』所収法語にも見られるはずであり、比較対象が『指南抄』であれば、余計に大きな差異が見られるはずである。

〈『三部経大意』に特異な至誠心釈〉

『三部経大意』に特異な至誠心釈は、以下の通りである。長文ではあるが、その長さが問題であるので総て挙げておく。

貪瞋邪偽奸作百端ニシテ惡性侵シカタク、事、蛇蝎ニ同。雖起三業、名爲雜毒善。亦虛假ノ行トナツク。眞實ノ行トナツケサルナリ。若如此安心起行ヲ作ス者ハ、タトヒ子ムコ六ニ身心ヲハケマシテ、日夜十二時ニ急ニ走り急ニ作テ、灸頭燃コトクニスルモノハ、モロモロニ雜毒ノ善ト名ク。此雜毒ノ行ヲ廻シテ彼ノ佛ノ淨土ニ生ル、コトラ求メムト欲スルモノハ、コレ必ス不可ナリ。何以テノ故ニ、正ク彼阿彌陀佛因中ニ菩薩ノ行ヲ行シ給シ時キ、乃至一念モ一刹那モ三業ニ所修、皆是眞實心ノ中ニ作ニヨリテナリ。凡所施趣キ求ルカ爲ニ亦皆眞實ナリ。

又眞實ニ二種有リ。一者自利眞實、二者利他眞實ナリ。自利眞實ト者ハ、復二種アリ。一者眞實心ノ中ニ自他ノ諸惡及穢國等ヲ制捨シテ、一切ノ菩薩ト同ク諸惡ヲ捨テ諸善ヲ修シ、眞實心ノ中□ナスヘシト云ヘリ。此外多クノ釋有リ、頗フル我等カ分ニコエタリ。

但此至誠心ハヒロク定善ト散善ト弘願トノ三門ニワタリテ釋セリ。是ニツキテ惣別ノ義アルヘシ。惣者、自力ヲ以テ定散等ヲ修シテ、往生ヲ願フ至誠心也。別者他力ニ乗テ往生ヲ願スル至誠心也。其故ハ、■ノ疏ノ玄義分ノ序題ノ下タニ云ク、定ハ即慮ヲヤメテ以テ心ヲコラシ、散ハ即惡ヲ廢シテ以テ善ヲ修ス。此ノ二善ヲ廻シテ往生ヲ求也。弘願者、大經ニ説カ如シ、一切ノ善惡ノ凡夫生ル、事ヲ得ハ、皆阿弥陀佛ノ大願業力ニ乗シテ増上縁トセスト云事ナシトイヘリ。自力ヲ廻シテ他力ニ乗ル事ハ明ナルモノカ。シカレハ初二切衆生ノ身口意業ニ修ル所ノ解行、必眞實心ノ中ニナスヘシ、外ニ賢善精進ノ相ヲ現シテ内ニ虚假ヲ懷ク事エサレト云ヘル。

其■解行ト者、罪惡生死ノ凡夫、弥陀ノ本願ニ乗シテ十聲一聲ニ決定シテ生ルヘシト眞實ニサトリテ行スル是也。外ニハ本願ヲ信スル相ヲ現シテ、内ニハ疑心ヲ懷ク、是ハ不眞實ノ心也。虚假ノ心也。

次、外ニハ賢善精進相ヲ現シテ内ニハ懈怠ナル、是ハ不眞實ノ行也。虚假ノ行也。貪瞋邪偽奸詐百端ニシテ惡性ヲカシカタシ、事、蛇蝎ニ同シ、雖トモ起スト三業ヲ、名テ雜毒ノ善トス。又虚假ノ行ト名ク。眞實ノ善ト不名云ヘリ。自他ノ諸惡ヲステ、三界六道ヲ毀厭シテ、皆ナスヘカラク眞實ナルヘシ。故ニ至誠心ト名クト云ハ、是惣義也。故如何ト者、深心ノ下ニ、罪惡生死ノ凡夫曠劫ヨリ以來出離ノ縁アル事ナシト信スヘシト云ヘリ。若此釋ノ如ク、一切ノ菩薩ト同ク諸惡ヲステ、行住坐臥ニ眞實ヲモチキ

ハ惡人ニアラス、煩惱ヲハナレタル物ナルヘシ。彼ノ分段生死ハナレ、因果証シタル聖者ナラ貪瞋癡等ノ三毒ヲ起ス。何況一分ノ惑ヲモ斷セサラム罪惡生死ノ凡夫、イカニシテ此眞實心ヲ具スヘキカ。此故ニ、自力ニテ諸行ヲ修テ至誠心ヲ具セムトスルモノハ、專ラカタシ。千カ中ニ一人モナシト云ヘル是也。

スヘテ此ノ三心ハ、念佛及諸行ニワタリテ釋セリ。文ノ前後ニヨリテ心得エワカツヘシ。例ハ四修ノ中ノ無間修ヲ釋シテ云ク、相續シテ恭敬・禮拜・稱名・讚嘆・憶念・觀察・廻向發願シテ、心々相續シテ餘業ヲ以テキタシ不間、故名無間修。又以貪瞋煩惱、不來間、隨テ犯セハ隨テ懺シテ、念ヲ■テ隔テ、時ヲヘタテ、日ヲヘタテス。常ニ清淨ナラシムルヲ又無間修ト名クト云ヘリ。是モ念佛・餘行ヲワカチテ釋セリ。初釋ハ貪瞋等ヲハイウス、餘行ヲ以テキタシヘタテサル無間修也。後釋ハ、行ノ正雜ヲハイウス、貪瞋等ノ煩惱ヲ以テキタシヘタテサル無間修也。

シカノミナラス、二行ノ得失ヲ判シテ云ク、上ノコトク念々相續シテ、命チヲハルヲ期トスル物ハ、十八即十ナカラ生レ、百ハ即百ナカラ生ル、何ヲ以テノ故ニ、佛ノ本願ト相應スルカ故ヘ□、教ニ違セサルカ故ニ、佛語ニ隨順スルカ故ニ。若專ヲ捨テ、雜業ヲ修スルモノハ、百カ時ニマレニ一二ヲ得、千ノ時ニマレニ三五ヲ得。何ヲ以ノ故ニ、雜縁亂動シテ正念ヲ失カ故ニ、佛ノ本願ト相應セサルカ故、教ト相違スルカ故ニ、佛語ニ隨ハサルカ故ニ、係念相續セサルカ故ニ、憶想間斷スルカ故ニ、廻願慇重眞實ナラサルカ故ニ、慚愧懺悔ノ心アルコトナキカ故ヘ二等ヲ云ヘリ。

此中貪瞋諸見ノ煩惱キタリ間斷スルカ故ニト云ヘリ等ハ、ヒトリ雜行ノ失ヲ出セリ。コ、ニ知ヌ、餘行ニヲヒテハ貪瞋等ノ煩惱ヲ發サスシテ行スヘシト云事ヲ。是ニナスラエテ思ニ、貪瞋等ヲ■キラウ至誠心ハ餘行ニアリト見ヘタリ。何ニ況廻向發願心ノ釋ハ、水火ノ二河ノ喩ヲ引テ、愛欲・瞋恚ノ水火常ニウルヲシ、常ニヤキテヤムコトナケレトモ、深心ノ白道タルコトナケレハ、生ル、事ヲウトイヘリ。^③

へ『和語灯録』と『西方指南抄』の比較

『和語灯録』と『指南抄』に収録される法語のうち、比較の対象となるものは、岸一英氏の一覽表をもとにして次の通り挙げられる。

- 『和語灯録』
 - 「三心義」
 - 「十七条法語」のうちの一法語
 - 「念仏大意」
 - 「九条殿北政所御返事」
 - 「九条殿下の北政所へ進する御返事」
 - 「鎌倉二位禪尼に答ふる書」
 - 「鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事」
 - 「要義問答」
 - 「要義問答」
 - 「大胡太郎実秀に答ふる書」
 - 「大胡太郎実秀へつかはす御返事」
 - 「大胡太郎実秀の妻に答ふる書」
 - 「大胡太郎実秀か妻室のもとへつかはす御返事」

- 「熊谷の入道へつかはす御返事」
 - 「熊谷へ遣はす書（九月十六日付）」
 - 「津戸の三郎入道へつかはす御返事」
 - 「津戸の三郎に答ふる書」
 - 「黒田の聖人へつかはす御文」
 - 「黒田の聖へ遣はす書」
 - 「越中光明房へつかはす御文」
 - 「光明房に答ふる書」
 - 「正如房へつかはす御文」
 - 「正如房へ遣はす書」
 - 「十二の問答」
 - これらの文献について比較を行い異同を確認した。比較結果すべては研究ノート「元亨版『和語灯録』と『西方指南抄』の比較対照」として別出しているので、そちらを一覧されたい。ここでは典型的な例として「三心義」の一部を挙げる。^⑤この法語は、『和語灯録』が和文であるのに対して、『指南抄』では「十七条法語」として収録される一連の法語の一つに該当し、かつ当該法語は漢文体で収録されるものである。ただし、返り点および詳細なルビが付されているため、ここではそれらに従ったうえでの比較である。（『和語灯録』を基に太字ゴチックと二重取り消し線によって『指南抄』との異同を記す。）
- 聖道門といふは この娑婆世界にして煩惱を斷し 菩提を證する
 みちなり 淨土門といふは この娑婆世界をいとわうて かの極
 樂をねかひて 善根を修する門なり 二門ありといへとも 聖道
 門をさしおきて淨土門に歸するなり しかるにもし人ありておほ

く經論をひきて 罪惡の凡夫往生する事をえしすといはん このことはをききてきくと雖とも退心をなまず生せず いやいよ信心をますべし ゆへいかなとなれば 罪障の凡夫の淨土に往生すといふ事はするは 此れ釋尊の誠言なり 凡夫の妄執にあらず われすてに佛の言を信してふかく淨土を欣求す たとひ諸佛菩薩きたりて 罪障の凡夫淨土にむまゝへかちすれすとの給ふとも これを信すへからず ゆへいかなとなれば何を以ての故に 菩薩は佛の弟子なり もしま事実にこれ菩薩ならば佛説をにそむくへからず しかるにすてに佛説に□□ひて違して往生をえすしとの給ふ 知りぬ 事の菩薩にあらずということを 是の故に信すへからすと。又佛はこれ同體の大悲なり ま事実に佛ならば釋迦の説にたかふへからず しかればすなはち阿彌陀經に 説かく 一日七日彌陀の名號を念してすれば かならずむまゝも事往生をうとせけりいへるは 此れを六方恆沙の諸佛 釋迦佛におなしく 虚しからすとこれを證誠し給へり しかるにいま釋迦の説をにそむきて往生せずをえしといふ かるかゆへにしりぬ ま事真のほとけにあらずと これ天魔の變化なり この義をもてのゆへに依り信すべからず 佛菩薩の説なりとも尚ほ以て信すへからず いかにいはんや餘説をや なんとちか執するところの大小ことなりといへとも みな同じ佛果を期する穢土の修行は 聖道門の心意なり われらか修するところは 正雜不同なれとも同じからず ともに極樂をねかふ往生の行業は淨土門の心意なり 聖道門はこれ汝ちか有縁の行なり 淨土門といふはわれちか有縁の行なり

これをもてかれを難すへからず かれをもてこれを難すへからず かくのことく信するものを 是を就人立信となつく^⑥ 見られる通り、語句の違い、出入りは指摘できるが、思想的内容を説き示すような段落レベルの出入りは見ることができない。以下には『和語灯録』に対して『西方指南抄』にのみ存在し、比較的長文の意味的まとまりのある文章を含む箇所について指摘する。

「念仏大意」

しかるを道綽禪師は決定往生の先達なり 智恵ふかくして講説を修し給ひき 曇鸞法師の三世已下の弟子也 かの曇鸞師は智恵高遠なりといへとも 四論の講説をすてて 念仏門にいりたまはむや わかしのところ さわるところ なむそおほしとするにたらむやとおもひとりて涅槃の講説をすてて ひとへに往生の業を修して 一向にもはら彌陀を念して 相續無間にして 現に往生し給へり^⑦

これは、道綽が曇鸞の事跡に触れ『涅槃經』の講説をやめ、淨土教へ帰入したことについて言及する箇所であるが、念仏の教義に関わるものではない^⑧。

「鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事」

此れはしかれはすなはち 修行する事あるをみては毒心をおこし 方便してきおひうてあたをなす かくのこときくの生盲闡提のともからば 頓教を毀滅してなかく沈淪す 大地微塵劫を超過

すとも いまた三途の身をはなれんる事を得べからずるとき給へり

見有修行起瞋毒 方便破壊競生怨 如此生盲闍提輩 毀滅頓教永沈淪 超過大地微塵劫 未可得離三途身 大衆同心皆懺悔 所有破法罪因縁

この文の心は 淨土をねかひ念佛を行する人を見ては毒心をおこし ひか事をたくみめくらしめて 様々の方便をなして専修の念佛の行をやふり あたをなして申とむるに候也 かくのこくの人 は むまれてより佛法性のまなこしゐて 善根のたねをうしなへる闍提人のともからなり この彌陀の名號をとなへて なかき生死をはなれて 常住の極樂に往生すへけれども この教法をそしりほろぼして このつみによりてなかく三惡道にしつむとき かくのこくきの人 は 大地微塵劫をすくれとも なかく三途の身をはなれん事あるへからすといふ也⁹⁾

ここは、専修念仏者を誹謗する者がいかなるものであるかについて、善導の『法事讃』を典拠として説明している箇所である。『指南抄』は『和語灯録』には存在しない『法事讃』の原文を挿入しているが、内容については、その前後が説明しており、思想的なレベルでの出入りとみなすことはできない。

「要義問答」

答 善導釋しての給はく、行に二種あり 一には正行 二には雜行 正の中に五種の正行あり 一には禮拜の正行 二には讚嘆供

養の正行 三には讀誦の正行 四には稱名の正行觀察正行 五には觀察の正行稱名の正行也 一に禮拜の正行といふは 禮せんには すなはちかのほとけを禮して餘禮をましへされ 二に讚嘆供養の正行といふは 讚嘆せんには すなはちかのほとけを讚嘆供養して 餘の讚嘆供養をましへされ 三に讀誦の正行といふは 讀誦せんには 彌陀經等の三部經を讀誦して 餘の讀誦をましへされ 四に稱名の正行といふは 稱せんには すなはちかのほとけを稱して 餘の稱名をましへされ觀察の正行といふは 憶念觀察せんには かの土の二報莊嚴等を觀察して 餘の觀察をましへされ 五に觀察の正行といふは 憶念觀察せんには かの土の二報莊嚴等を觀察して 餘の觀察をましへされ 稱名の正行といふは 稱せんには すなはちかのほとけを稱して 餘の稱名をましへされ この五種を往生の正行とす¹⁰⁾

これは、五種正行の順番の違いである。『和語灯録』が、一禮拜、二讚歎供養、三讀誦、四称名、五觀察としていところ、『指南抄』が四を觀察、五を称名としているということである。ところで、この「要義問答」における五種正行の順番は、『選択集』第二章およびその典拠である『觀經疏』散善義における、一讀誦、二觀察、三禮拜、四称名、五讚歎供養とも異なっていることが指摘できる。そして、『和語灯録』において五種正行に言及するものとして「三心義」「淨土宗略抄」「大胡太郎実秀へつかはす御返事」「津戸の三郎へつかはす御返事」（拾遺）の四文献が見られるが、前の三つは『選択集』の順序と同じである。また「津戸の三郎へつかはす御返事」（拾遺）は

「第四の念仏」とのみ記され他の四種の順番については記述がないが、他と同様に『選択集』の順序であると考えて差し支えはなからう。よって、この「要義問答」は五種正行の順番について特異な記述が見られる文献であるといえる¹¹⁾。さて、『和語灯録』と『指南抄』の異同という点に関しては、五種の順番の入れ替えが見られるというのみであり、思想的內容に直接関わるものではないといえる。

「大胡太郎実秀へつかはす御返事」

又専修のものは 十人は十人なからむまれ 百人は百人なからむまる なにをもてのゆへに 外の雑縁なくしてなし 正念をうるかゆへに 彌陀の本願とあひ叶ふる相応するかゆへに 釋迦のおしへにたかはまゐしたかふかゆへに 恒沙の諸仏のみことにしたかふかゆえに 雜衍修のものは 百人か中に一二人もまれ 千人か中に四五人もまる なにをもてのゆへに 雑縁亂動してす正念をうしなふかゆへに 彌陀の本願とに相應せざるかゆへに 釋迦のおしへにしたかはざるかゆへに 諸仏のみことにしたかはざるかゆへに 係念相續せざるかゆへに 憶念想間斷するかゆへに 名利と相応するかゆへに ~~みづから~~往生の業をまへ他の往生を~~もまゐ~~か自障障他するかゆへに このみて雑縁ちかつきて往生の正行さふるかゆへになれと釋せられて候めれば 善導和尚をふかく信して 淨土宗にいらん人は 一向に正行を修すへしと申す事にてこそ候へ¹²⁾

これは、『選択集』第二章が『往生礼讃』を引用して、専修に対する

雑修の、いわゆる十三の失を挙げる箇所に対応するものである。『選択集』では専修の者が往生できる理由として、「無外雑縁得正念」「与仏本願得相応」「不違教」「随順仏語」の四つが挙げられ、『指南抄』がこれに準ずるのに対して、『和語灯録』は三つのみである。また十三の失については、『指南抄』が九つ、『和語灯録』が六つといずれも原典とは同一ではない。往生可能な理由と失に共通して、『和語灯録』が「諸仏のみことに……」という点を欠くが、段落レベルの異同ではない。

「大胡太郎実秀へつかはす御返事」

上野のくにの住人おほこの太郎と申もの 京へまかりのほりたる ついてに 法然聖人にあひたてまつりて 念仏のしさいといたてまつりて 本国へくたりて念仏をつとむるに ある人申ていはく いかなる罪をつくれとも 念仏を申せは往生す 一向専修なるへしといふとも ときときは法華經をもよみたてまつり また念仏申さむもなにかはくるしからむと申ければ まことにざるかたもありとて 法然聖人の御もとへ 消息にてこのよしをいかかと申たりける御返事 かくのことし 件の太郎はこのすすめによりて めおとこともに往生してけり¹³⁾

これは、一定の長さを持つ『和語灯録』に欠落する文であるが、消息に対する情報を記すものであり、法然の言葉ではない。したがって思想的な問題を孕むものではない。

「津戸の三郎入道へつかはす御返事」

一 この世のいのりにも神にも申さん事は そもくるしみ候まし 後世の往生 念仏のほかにあらず行をすること 念仏をさまたくれは あしき事にて候へ この世のためにする事は往生のために候はねは 仏神のいのりさらにくるしかるましく候也¹⁴

「津戸の三郎入道へつかはす御返事」は、箇条書き形式の消息であるが、今挙げた条と次に挙げる二条は『和語灯録』が全文欠いているものである。この消息のこの欠落のみを見れば、『和語灯録』編纂に際して了慧が、喩えこの世の祈りとはいえ念仏以外の行を認めないという立場から削除したという考え方もできるが、この条に類似する、すなわち「この世の祈り」として念仏以外の行を禁止しない法語が、『和語灯録』所収の「鎌倉の二位禅尼へ進する御返事」に見られる¹⁵。したがって、思想的な問題により了慧が削除したとは考えにくい。

「津戸の三郎入道へつかはす御返事」

一 御仏 おほせにしたかひて開眼してくたしまいらせ候 阿弥陀の三尊つくりまいらせさせたまひて候なる 返返神妙に候いかさまにも仏像をつくりまいらせたるは めてたき功德にて候也

一 いま一いふへき事のあるとおほせられて候は なに事にかけ候らむ なむ条ははかりか候へき おほせ候へし¹⁶

この二条は『西方指南抄』に連続して記されているもので、内容的に連続するものではないが、そのまま挙げる。はじめの条は、法然が頼

まれていた阿弥陀仏の開眼を行った旨が記されており、思想的な説示は見られない。後の条については、津戸三郎からの手紙に何らかのめかすことがあったのであろう、それが気になるという事のみである。

〈結論〉

以上、『和語灯録』と『指南抄』の両者に収録される同内容文献を比較し検討してきた。全体的な傾向としては、研究ノート「元亨版『和語灯録』と『西方指南抄』の比較対照」に概観されるように、段落レベルでの異同は僅かではない。そして、本論ではその僅かな箇所である一定の分量を有する異同箇所について検討してきた。今回挙げた異同箇所のいずれも、思想的な立場の違いに由来すると考えられるようなものは見られず、ましてや『三部経大意』と『三部経釈』程の異同は見られなかった。

ところで、元亨版『和語灯録』の序文において了慧は、

いささか上人のふるきあとをたつねて やや近代のあたらしきみちをすてんとおもふ 仍てあるひはかの書状をあつめ あるひは書籍にのするところの詞を拾ふ¹⁷

と述べ、法然の滅後生じてきた新たな教説に対して、原点となるべき法然の遺文を集めたことを記している。手に入れた遺文に思想的な理由によって了慧自身が手を加えたとなれば、それは新たな文献を作り出すということにはならないだろうか。また跋文においては、

およそ二十餘年のあひた あまねく花夷をたつね くはしく眞偽をあきらめて これを取捨すといへとも あやまる事おほからん

後賢かならずたすへし 又おつるところの眞書あらは この拾遺に續くへし¹⁸⁾

と自身の誤りの可能性と、自身が見つけることのできなかった文献を見つけたならばこの『語灯録』に加えるべきことを述べている。了慧が自身の基準により法然の言葉を確認し、門流間の中でそれを一定の権威として固定することが目的であったとは考えにくい表現である。了慧が用いた原典資料が発見、確定されない現状においてはどこまでも推測の域を出ないものであるが、『和語灯録』編纂における了慧の改変は、思想的な理由に起因する恣意的な段落レベルでの加減はないと見るのが妥当である¹⁹⁾と考える。

今回の考察は『三部経大意』を直接扱うものではなく、間接的にその可能性について考えるものであって、当然断定にいたるものではないが、『三部経釈』における至誠心釈の欠落は、『和語灯録』の序文に記される編纂の意図にも反するものであり、少なくとも了慧の手によるものではないと考えるべきであろう。

〔注〕

- (1) 藤堂恭俊氏は、了慧の師である良忠が、『玄義分記』に「定散之外不可別立弘願一行」としているように、西山義を邪義視しており、こうした師の宗義に基づき、了慧は「定善・散善・弘願の三門」に言及するこの至誠心釈を、西山義に類似するものとして削除したと論じる。『法然上人研究』一『一九八三年、山喜房。二七九～二八六頁。』また善祐昭氏は、了慧の著述『選択集綱抄』に見られる三心論に着目し、了慧が「西山義の三心観を批判しながら自説を展開しており、人間の内面のありようによって自力・他力をわけること」を否定してい

る点と、「仏と人間の双方に真実がある」ことを主張している点を指摘し、こうした見解にそぐわない『三部経大意』の至誠心釈を削除したと推論している。『法然『三部経大意』における諸問題』、『浄土宗学研究』二十二号（一九九六年）。

- (2) 例えば中野正明氏は、『没後遺誠文』の比較研究から、『指南抄』所収本が親鸞による意図的な改変の可能性を指摘している。『法然遺文の基礎的研究』〔法蔵館、一九九四年〕三一九頁。

- (3) 『金沢文庫研究紀要』第十一号（一九七四年）所収の翻刻を用いた（二二〇～四頁）。なお、改行および句読点は市川が加えた。『昭法全』三三～六。

- (4) 佛敎大学総合研究所編『シンポジウム』法然と親鸞（法蔵館、一九九七年）所収。

- (5) 全般的な異同の多少については、文献による偏りが見られた。「三心義」「鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事」「大胡太郎実秀へつかはす御返事」「十二の問答」は比較的異同が多く、対して「熊谷の入道へつかはす御返事」「黒田の聖人へつかはす御文」「正如房へつかはす御文」は異同が少ない。

- (6) 『龍大善本和語』五八二下～三上。『親鸞眞蹟』第五卷、三〇二～七頁。『昭法全』四五五～六。

- (7) 『龍大善本和語』五九〇下～一上。『親鸞眞蹟』第六卷、七五一～二。『昭法全』四一〇。

- (8) 因みに、『和語灯録』に無く『指南抄』に有る文章のもとと考えられるものは、次の往生伝に見られる。

迦才『浄土論』卷下（『漢語燈録』所収「類聚浄土五祖伝」所引）。「況我小子所知所解何足為多」（『浄全』六、六五九上。）

『漢語燈録』所収「類聚浄土五祖伝」に所引の「新修往生傳」。「況我小子所解何足為多」（『昭法全』八四九。）

- (9) 『龍大善本和語』六〇五下～六上。『親鸞眞蹟』第五卷、四七四～八。『昭法全』五二八～九。

- (10) 『龍大善本和語』六〇九下～一〇上。『親鸞眞蹟』第六卷、八一〇

〽三。『昭法全』六一六〽七。

- (11) 『教行信証』の化身土巻では、散善義が引用され、親鸞の注釈が施されているが、この注釈には五種正行を基とした五專が示される。こちらでは「一つには専礼、二つには専読、三つには専観、四つには専名、五つには専讃歎」と更に異なる順番で記されている。（岩波文庫『教行信証』三四九頁。『親鸞聖人真蹟集成』第二巻、五一六頁へ法藏館、一九七四年。）

- (12) 『龍大善本和語』六二二下。『親鸞真蹟』第六巻、六〇五〽八。『昭法全』五二三〽四。

- (13) 『親鸞真蹟』第六巻、五六〇〽二。『昭法全』五一四。

- (14) 『親鸞真蹟』第六巻、九〇六〽七。『昭法全』五〇四。

- (15) 一 人々の堂をつくり 佛をつくり 經をかき 僧を供養せんをはよくよく心をみたらすして 信をおこして かくのことくの雜善根をも修せしめ給へ と御すすめ候へし

一 この世のいのりに 念佛の心をしらすして 佛教にも申し 經をも誦し書き 堂をもつくらは それもさきのことく候へし せめては又後世のためにせはこそ候はめ その要なしとおほせ候へからす 専修をさふる行にもあらさりけりと おほしめし候へし

（『龍大善本和語』六〇六下。『昭法全』五三〇。）

- (16) 『親鸞真蹟』第六巻、九一〇〽二。『昭法全』五〇五。

- (17) 『龍大善本和語』五五七下〽八上。

- (18) 『龍大善本和語』七〇〇下〽一上。

- (19) 中野正明氏は、嵯峨清涼寺に現存する熊谷直実書状と『和語灯録』諸本の比較研究から、了慧の編集態度を評価している（前掲書、二四八頁）が、本考察もこの見解に賛同するものである。

（いちかわ さだたか 仏教学科）

二〇一七年十一月十五日受理